

三條別院のご案内

真宗大谷派三條別院

TEL: 0256-33-0007

E-mail: sanjo-beisun@wmg.or.jp

三條別院に想う

【特別編の慶讃法要…「宿縁」と「宿業」について】

▲来る五月二十九日宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年立教開宗八百年慶讃法要三條教区お待ち受け大会が三條別院で開催されます。親鸞聖人はお念仏にであったよろこびを「遠慶宿縁」と表現されています。一方、新型ウイルス感染症の流行が二年続く中、参詣席の制限を設けるなどの工夫をしつつ、準備をしており、世の中は依然として、「自粛」という決して明るいとはいえない雰囲気です。慶讃法要儀式部会委員でもある島津氏は一見明るい「宿縁」と一見暗い「宿業」の関係について、最近考えられているとお聞きしましたので、執筆いただきました。

教区慶讃法要お待ち受け大会に向けてひとこと

宿業という言葉から何を連想するでしょうか。暗いとか、悲壮なとか、あまり考えたくない面倒な話、前時代的な古臭い考え、自己責任、自己否定等々、ネガティブな印象の言葉が並ぶことでしょう。

また、前世だとか来世なんて、そんなふうに見えること自体どうかしてる。一度きりの人生を精

一杯楽しんだ方がいいでしょう。どうせ死んだら無に帰するのだから、前世来世なんてあるはず無いでしょう。だから、葬式も無意味、お墓も無駄、お骨もゴミ、みたいなことになっていくのでしょうか。

それにたいして、真面目に宿業に対峙しても自分ではとても受け止めることはできません。病気になるったり、災害に遭ったりするのも宿業だから仕方がないとはとても思えません。自分の触れたくないことを自覚しなさいと言われるても自覚なんてできないでしょう。

よく機の深信の自覚から如来に遇う、機の自覚が先にあつてというけれど、果たしてそうでしょうか。自分で宿業を自覚しようとして掘り起こして行っても聞ばかりで嫌になってしまふのが関の山でしょう。

親鸞聖人が地獄は一定と言われたけれども、この言葉もこれだけを取り出して考えれば、非常に悲しみ深い、苦しい、救われがたい、悲壮感を漂わせているような言葉、でも浄土真宗はそのような悲しい教えなんでしょうか。

宿業は、自覚するのではなくて、知らされてく

るのだと思います。それも信知するという形で。知るに存知と信知とあると言われます。存知は自分の知識として知ること。信知とは、如来を信ずることによって、如来を通して知らされてくること。

本当の宿業は自分では分からない。如来の大悲とセットでなければ分らないと思います。如来大悲によって自身の触れたくないこと、見たくないことも悲しいこと嫌なこととしてでなく、自身自身を作り上げているものとして知らされてくるように思います。

如来を信ずることによって、自分自身そのものを宿業煩惱の身として信じられるのではないのでしょうか。

島津 崇之氏（第十八組満行寺）



○今回の「三條別院に想う」は、

松木 譲氏（第二十四組専明寺）

より、執筆いただきます

▲このたびの春彼岸会に二日間参拝された松木氏に、参拝記を、執筆いただく予定です。

春 彼 岸 会 報 告



いまだ寒さの残る三月十八日から二十日までの三日間、三条別院春彼岸会が勤められました。今年の法話講師は藤本愛吉氏（三重県津市正寶寺住職）で二日間を通してお話しいただきました。京都の大谷専修学院で学び、そして職員として勤められていた時の出会いの話を中心にお話しいただきました。「落第が大事ですよ、変に落ち着くとだめですよ」「行くところまで行くんじや」「のんびりがいいんじや」等、信國淳氏、竹中智秀氏、児玉暁洋氏、弧野秀存氏等、先生として先輩とし

て影響を受けた念仏者の言葉を紹介しながら、「人を選んで分けて嫌って、選んで切り捨てる」自分自身のあり方と、それを越えた仏の世界について、全四座ご法話いただきました。藤本氏自身が教えられた専修学院の生活について話されながら、「壊れる人間関係ならいっぺん壊れたらいい」と、時には厳しい言葉を交えながら終始笑顔で話されました。

十九日のお斎は三条スパイス研究所と協力して作った「釈迦礼弁当—sua curry Lunch box—」を参詣者に提供しました。ふきのとうカレーを中心とした地元野菜などの食材もふんだんに使った精進弁当で、約五十名の参詣者も喜んでいました。

東北地方で激しい地震があり、ロシアとウクライナをめぐる争いもあり、依然として新型コロナウイルス感染症も収束しない中、また、情報が錯綜する中で私たちは今何をすべきなのか、分からなくなります。そんな時、事実を素直に言い合える関係を大切にしてきた仏教の教えに静かに腰を据えて聞く時間が大切だと感じた春彼岸会でした。



【美しく、そして美味しい 精進弁当】

三 条 別 院 公 開 講 座

六月二十五日（土）三条別院本堂午後二時〜
【三条別院にてWEB開催（自宅で視聴可能）】
中島 岳志氏（東京工業大学教授）



東京工業大学では二〇二〇年より未来の人類研究センターが発足し、人文科学・社会学と理工系の知の対話が始まっていて「利他プロジェクト」を中心にお話いただけます。

3 . 1 1 勿 忘 の 鐘 報 告

震災より十一年目となる二月十一日に三条別院では今年も**勿忘（わすれな）の鐘**を撞きました。感染症対策のために広くは呼びかけができませんでしたが、輪番・淨圓寺御当院・当日来院されていた坊守会役員の方々や有縁の方々と、別院職員・教務所員で、鐘撞と黙とうを行いました。年月が経ち記憶が薄れていく中でこそ、震災はどう

いう出来事であったのか「忘(わす)れること勿(な)かれ」と、勿忘(わすれな)の鐘を行う意味合いが深まっていくことを感じさせられました。



【第一打を撞く海岸輪番】

3・12報尽碑参拝報告

明治十六(一八八三)年三月十二日、尾神岳で発生した雪崩に、本山両堂再建の献木にするケヤキの大木を運ぶ御門徒が巻き込まれ二十七人が命を落としました。高田教区第十二組主催で毎年祥月命日の参拝が続けられており、昨年に引き続き別院職員・教務所員数名と教区内の有志の方々も参拝団に加わりました。現地は依然三m程の残雪でかんじきを履いて二時間ほど山道を歩き、報尽碑を掘り起こし、勤行・法話が行われました。献木は当時の人々にとつての一大行事で、食事をふるまいに来ていた女性と手伝いの子どもたちの多くが雪崩に巻き込まれ

たというお話も聞き、現地に行ってみると、当時の人の思いがより身に迫ってきました。



【雪に埋まった報尽碑を掘り起こし、勤行】

庭講活動報告

中庭の雪も解けた三月十三日、今年初めての庭作業で冬囲い撤去と落ち葉掃きを行いました。草木の芽吹きが今から待ち遠しいです。来月は、藤棚作製と池の清掃を行う予定です。



【書院の庭の冬囲いを外す作業】

宗祖御命日のつどい

宗祖親鸞聖人の御命日であります毎月二十八日に、「御命日の集い」を本堂にて、日中法要と法話、その後、座談会の場を開いております。どなたでもお参りいただけます。皆様のご参詣をお待ち申し上げております。

なお、前日(二十七日)はお速夜法要を、午後一時三十分よりお勤めしております。

◆日時 四月二十八日(木) 午前十時より

◆会場 三条別院 本堂

◆お勤め(御命日 日中法要)

文類偈 行四句目下

念仏讚 洵五

和讃 回口 次第六首

回向 願以此功德

◎今月の法話講師

本多智之氏(第十八組永傳寺)

▲本年も身近な御聖教である『御文』五帖目について継続して、聞いていきます。

◆今後の講師一覧

五月 大久保 州氏(佐渡組廣永寺)

六月 村手淳史氏(第二十組光圓寺)

フードバンク事業を継続中!

―三月の別院でのフードドライブに

ご協力いただいた御寺院・御門徒―

第十三組廣永寺、第二十組松韻寺、佐渡組門徒

その他匿名含め多くの方々にご協力いただき御礼申し上げます。次回引き取り予定日は四月二十五日(月)です。

定例法話会のご案内

毎月十二日の闡如上人のご命日の定例法話会を宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃お待ち受け事業として開催中です。全八回のうち六回が終了し、五月二十九日教区慶讃お待ち受け大会に向け昨年と同じく講師に慶讃テーマ「南無阿弥陀仏人と生まれたことの意味をたずねていこう」と及び親鸞聖人の「御誕生立教開宗」を中心にお話しいただいています。

◆今月の講師

四月 中山 善雄氏 (教学研究所 研究員)
講題 「生まれいずる怨み―五逆の罪人の救い」



▲感染症の影響などで、直接来院できない方に向けて、YouTube配信もしております。

併せてチャンネル登録もおぜひ願います。



◆今月の講師

五月 澤面 宣了氏 (長浜教区 浄願寺)
「常に世の小さき人々と共に生きる」

◆日時・日程

毎月十三日 午後一時半 お勤め・感話

二時 法話、三時半 座談、四時半終(予定)

◆持ち物：念珠、勤行本(赤本)、筆記用具

その他の講座案内

○別院声明教室

【月一回、午後六時～八時】

二月二十五日(金) 三月十四日(月) 四月十五日(金)、五月十六日(月)、六月十三日(月)

講師 關根大丘氏(第二十組松韻寺) 参加費五〇〇円/回

○別院書道教室 (生徒募集中！)

【月二回第一、第四水曜日、午後六時三十分～八時】

講師 木原光威氏(新潟県書道協会理事)

月謝 三,二〇〇円(テキスト代含む)

随時募集中

○有志の会庭講【毎月十三日】

【一緒に別院のお庭を整備していきませんか？】

○有志の会花講

花講は別院の立花を、有志の会は別院行事に併せた奉仕活動や季節ごとの懇親会を行っております。

○三条別院巡回

三条別院から御本尊(絵像)をお迎えして、開法会を開催しませんか？

○別院奉仕研修について

【奉仕研修参加金】

一人あたり半日(午前または午後) 五百円、一日千円

一泊二日は上記の参加金に順じて半日五百円で計算する。

【その他実費でいただくもの】

①講師謝礼。なお、列座によるお内仏のお給仕・法話は研修参加金に含まれる。②シーツ等クリーニング代千円

③食事代(要領等)ございましたらご相談承ります。

◆編集後記◆

『三条別院のご案内』四月号をお届けします。

今月の「三条別院に想う」は、第十八組満行寺の島津崇之氏にご執筆いただきました。ご多用の中、執筆いただき、ありがとうございます。

三月の三条別院定例法話では、北海道教区教證寺の寺澤三郎氏にご法話をいただきました。また、ご報告にもありますが、春彼岸会では、三重教区正實寺の藤本愛吉氏にご法話をいただきました。

同日ともに、三条別院のYouTubeチャンネルで、法話のライブ配信を行いました。通信の乱れや機材の不調等がございました。ご法話いただいた両ご講師ならびにライブ配信で聴聞いただいた皆様には、迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

ライブ配信での聴聞について、とある先輩が「画面越しでも聞く姿勢は同じだけど、恥ずかしながらつい片手間に聴聞しがちになつてしまふ」と自身の素直なあり様をお話ししてくれたのが思い起こされるのですが、その時、そもそも僕は「画面越し」でなくとも、いったいどんな姿勢で聴聞しているのかということが恥ずかしくも問われたように思いました。

寺澤三郎氏は「南無阿弥陀仏」を、自身の受け取りとして「あなた 無明の自分に一緒に目を覚ましていこう」という言葉で表現されてきました。

「南無阿弥陀仏」となつて知らされた「真実、自分自身のしたいこと」という願いに生きようとする歩みも、いつのまにか良し悪しや損得勘定での歩みに転じていきます。その姿を自分自身では見ることができません。だからこそ、その願いに帰り、「しなければならぬこと」ができることをもう一度一緒にはっきりさせていこうと、厳しくも温かく背中を押す「開法の間」に身を据える自分があるのだと思います。開法の姿勢が問われたのは、生活の中で「わかった気になつていったんだなあ」ということがあつたからなのでしょう。

仏の声を「聞く者」として歩まれた親鸞聖人の姿を憶念しながら、あらためて腰を上げて歩んでいきたいと思ひます。(閑崎)